

やはり俺が三〇〇人いるのはまちがっている。

エコー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

或る日の夜。

比企谷八幡は小説投稿サイトでweb小説を読んでいた、

そして、気がついたら……え、俺が三〇〇人!?

この短編は、投稿サイト「小説家になろう」でうつかり面白い作品を見つけて、俺ガイルとクロスしてみたくなって書きましたw  
「異世界転移したら三〇〇人になりました。ゝスライム移植から始まる自己増殖ライフゝ」

<https://ncode.syosetu.com/n6091fb/>

## 目次

やはり俺が三〇〇人いるのはまちがっている。

やはり俺が三〇〇人いるのはまちがっている。

やはり俺が300人いるのはまちがっている。

俺——比企谷八幡はベッドに寝転んで、目覚まし機能付き携帯電話、すなわちスマホの画面を見ながら、おやすみ前のひと時を過ごしていた。

「——なんだこれ、超おもしれえ」

今読んでいるのは、web小説サイトで見つけた、とある作品だ。

昨日から投稿を始めた作品らしいのだが、これが本当に馬鹿らしくて面白い。

内容は、異世界に転移する時にスライムと融合させられて、主人公が三〇〇人に増殖してしまうという、荒唐無稽な話だ。

「くくっ、よりによってワラビモチ。共食いかよ」

今は食事シーン。三〇〇人の主人公と、主人公を召喚してスライムを混ぜた張本人が、みんなでワラビモチを食べている。

うっかりその光景を想像してしまい、ツボに入ってしまった。これは材木座にも教えてやらなきゃだな。

お、もうこの話は終わりか。次のページを——

——突然の出来事だった。

気がついたら、俺……いや「俺たち」は奉仕部の部室にいた。

しかし、おかしい。吸い慣れない空気と、見覚えの無いデザインの机と椅子。

そして何より、俺を囲む俺、すなわち比企谷八幡の群れ。その群れは、未だ増え続けているのだ。

なんだこりやああああ!?

混乱して叫んだ瞬間、部室のドアが開いた。

「やつはろー……って、ええっ!?!」

未だ増殖中の俺の群れが、一斉に視線を向ける。

「「なんだ、由比ヶ浜か」」

「な、な、なんで、なんでヒツキーがいっぱいいるの!？」  
あ、またひとり増えた。

「二いや知らねえって。気がついたら増えてたんだよ」  
「みんなでいっぺんに喋った!？」

「ったく、うるさい奴だ。これから状況を把握しなきゃいけないって時に。」

「二あー由比ヶ浜、ちょっと静かにしてくれ」

「ヒツキーたちが声大きいからねっ!？」

そりやそうだな。いくら俺がコミュ障だからって、こんだけ大勢で一斉に喋ったら、うるさいに決まってる。

由比ヶ浜の的確過ぎるツツコミで声がピタリと止んだ。

あ、またひとり増えた。

「ヒツキーが……ヒツキーを産んでる……」

口をぱくぱくさせて驚いている由比ヶ浜の背後、再びからりと部室の扉が開く音がした。

「ごめんなさい、遅くなってしま……っ、た」

「ゆ、ゆきのん!？」

俺の群れに遮られて見えないが、声の主は、奉仕部の部長である雪ノ下雪乃だろう。

「ヒツキーたち!　　ゆきのん白目むいて倒れちゃった!」

\* \* \*

「――で、説明してくれるかしら。比企谷くんども」

「二俺に解る訳がねえだろ」

雪ノ下が気づくまでの間で、俺は三〇〇人に増殖していた。さすがに部室には入りきれないので、二〇〇人ほど廊下で待機させてある。

「大勢で同じ顔で、一斉に喋らないでくれる?　　気持ちが悪いわ。」

それでなくても常日頃から目が気持ち悪いのだから」

まあ、俺が三〇〇人いたらキモいよな。しかし最後の罵倒はいらん  
だろ。

しかし、どうしたものかね。

これじゃ部活どころの騒ぎじゃない。いや、依頼人が来るアテは無

いんだけどさ。

「ぎゃあああああ！」

お、廊下から響いてきたのは、顧問のアラサー独身女教師、平塚先生の声か。

勢いよく扉が開いたと思ったら、廊下の俺の群れをかき分けて、血相を変えた平塚先生が飛び込んできた。

「説明しろ比企谷あああああ」

腰だめに拳を引く平塚先生に、教室内の俺が一斉に身構える。

が、ファーストブリットもラストブリットもやって来ない。

「うううっ、数が多過ぎて、どの比企谷に鉄拳を浴びせたらいいのか……」

お。そういえばそうか。本体である俺が“俺の群れ”の中心にいれば、安全だ。

しかし、増えても俺は俺。思考は全員一緒らしく、俺を押し退けて俺が俺の方へ次々とやってくる。俺の大バーゲンだな、まるで。

「「お、おい、やめ……あ」」

「こうなったら、手当たり次第だ。歯を食いしばれ比企谷ども。抹殺のオオオオ……」

どんだん前に押し出されて……あ。先頭に押し出された。

「ラストブリットオオオオ」

あはれ、俺本人を含む数人の俺が吹き飛んだ。

「——で、この乱痴気騒ぎは一体なんなのかね」

「そっだよヒツキー、たち？」

「はあ、私は三〇〇人も更生させなければならぬのかしら……」

ちよつと雪ノ下さん。一人だけ質問じゃなくて愚痴になってますよ。

とかなんとか思考するも。

「わからねえよ。大体、さっきまで自分の部屋でなろうっ読んでた筈なん……あ」

これ、あの小説と一緒だ。

つまり俺は、スライムと融合して——いやあってたまるか、そんな

奇跡。

「あ、でもさ。考えようによつては、ラッキーじゃないかな」

「この男が増えたことが、なぜ幸運なのかしら。このままでは日本は破滅よ」

何故かテンションの上がる由比ヶ浜に、雪ノ下はこめかみを押さえながら首を振る。

「だつてさ、こんだけいるんだもん。ゆきのんとあたしで、シエアしちゃえば……いいんだよ」

おい待て由比ヶ浜。何故最後吐息まじりになった由比ヶ浜。

ええい、こつちを見るな頬を染めるな向こうの俺を見るな俺を見る……じゃなくて。

「……ね、ヒツキー。いいでしょ」

由比ヶ浜が上目遣いで見つめるのは、俺本体の三人向こうの俺だ。ニアピン賞だ。惜しかったな。

しっかしこいつ、たくましいな。どんだけ非常識な現象なのか、解っているのかね。

ふと、顔を上げた雪ノ下と視線がぶつかった。困ったような、判断を委ねるような、そんな表情。

それは、あの時の、顔。

「——わかった。さすがにこの人数だと、いくら俺でも鬱陶しい。一人と言わず百人くらい持つてけ」

うっかり吐いてしまう。途端、周囲の俺どもがザワザワと話し合いを始め、ジャンケンを始めてしまった。

あいこでシヨツ。

あいこでシヨツ。

あいこで——つて、気づけよ俺共。

思考が同じなんだから勝負がつく筈ないだろうが。

「——なあ、比企谷」

背後を俺に囲まれた平塚先生が、普段とは違う、弱々しい顔を向けてくる。

「私にも……貸してもらえるか？」

「いや理由が分からないんですけど」

特にその、頬を染めてしなやかな黒髪の毛先を指でクルクルと遊ぶ理由が、まったく分からん。

「わ、私だって、独り寝は……寂しいんだよ」

うわー、乙女だ。乙女がいる。だいぶクセが強いけれども。

「——分かりました。好きなだけ持ってってください」

「い、いや。一人でいいんだ。初めてで複数は、その……ハードルがだな」

何の話でしょうか平塚先生。ここは部室で、あんた高校教諭だろ。

ほら見ろ、またジャンケン始まつちまった。

「——とにかく」

おもむろに雪ノ下が立ち上がる。

「これでは正常な部活動は不可能ね」

正常な部活動。たまに来る依頼人が現れるまで、読者したり紅茶飲んだり。

あらためてだけど、それ正常なのん？

「ねえ、比企谷くん」

俺の群れの中を、雪ノ下が近づいてくる。他の俺には目もくれず、俺の本体に向かって。

思わず息を呑む。どうして雪ノ下は、俺が本体だと分かるのか。

雑考の間に、眼前まで雪ノ下は近づいていた。

「おまえ………なんで」

本体が俺だと分かったのか。

途切れた疑問は、雪ノ下の微笑によって解を得る。

「以前にも言ったはずよ。私は、貴方を、知っている」

心臓が、ひとつつ脈を打つ。そのたった一度の拍動は熱く、強く。あつという間に血液を体内に循環させ、同時に熱を運ぶ。

「あなた、この状況をどうしたいと思っっているのかしら」

その言葉には、いつもの陰はない。柔らかな声音は鼓膜を、脳を、心を揺さぶる。

「お、俺………は」



願いは分かっている。

こんな馬鹿げた状況から脱却することだ。しかし、それを口にしてどうなる。

いくら目の前の少女が成績優秀の万能超人でも、この事態の收拾など不可能なことだ。

分かっている。

解って、いる。

なのに。

何故、俺は言葉を発しようとするのか。いや、正確には、俺ではない。俺の中の、もっと奥底の、なにか。

それが、言葉を、想いを伝えたがっているのだ。

「俺は——」

「ヒツキー、大丈夫。大丈夫だから」

気がつくと、由比ヶ浜も目の前に立っていた。潤んだ瞳で俺を、俺だけを見つめるその少女は、誰よりも真実を願う。

分身なんて要らない。

まやかしや欺瞞なんて、いらぬ。

俺は。俺は——

「——俺は、本物が……ほしい」

その瞬間、俺の意識は光に落ちた。

\* \* \*

眩しい。

まだうまく開かない目を擦って、重い身体を起こす。

胸の上から、ポトリと何かが落ちた。スマホか。

——そうだ、どうなった。

周囲を見回すも、何処にも他の俺の影はない。

「——ふう、夢か」

俺が三〇〇人になったのは、夢。その現実には安堵する。

「お兄ちゃん、まだ寝てるの?」

部屋のドアの向こう、妹の小町が制服姿で睨んでいた。

ああ、夢でよかった。本当によかった。

つつがなく放課後を迎えた、奉仕部の部室。

由比ヶ浜は携帯をぼちぼちといじり、その向こうで雪ノ下は文庫本に目を落としている。

俺は、スマホで昨晚のweb小説の続きを読んでいた。

三人の前には、まだ湯気の立つ紅茶。

ああ、まったくの日常。

会話もなく、何も無い。

差し込む夕日の暖かさと、紅茶の香り。

平和だ。

「せんぱーい、助けてくださいよぉ〜」

ノックもせずに部室に飛び込んできたのは、一年後輩の生徒会長、一色いろは。

これも、日常の一部だ。

スマホを置くと、由比ヶ浜は携帯を閉じ、雪ノ下は文庫本を伏せて紅茶の用意を始める。

「せんぱーい、やばいんですう」

「そうか、なら断る」

やばいなら関わりたくない。なんなら働きたくない。

働いたら負け。家訓である。嘘である。

ぶーぶー騒ぐ一色を横目に雪ノ下を見やると、溜息混じりの微笑が零れた。

しやーねえなあ。

「とりあえず、用件を伺えるかしら」

紅茶の注がれた紙コップを一色の前に置いた雪ノ下が問う。まあ、大方生徒会のなんちゃらでアレがそうなのだろう。

そんなもん、ロジカルシンキングで論理的に考えれば解決するだろうに。なあ玉縄。ハイセン。

「えっとお、明日なんですけど、先輩をお借りしたいんです」

おい、ちよつと待て。奉仕部は部員の貸出しサービスはやってないぞ。それに。

「明日は……用事がある」

「えー、そうなんですかあ？」

先輩に用事なんてあるんですか、みたいな言い方はやめてね。

「そ、そーそー、明日はヒツキーは用事があるんだよ」

おい待て由比ヶ浜。

お前がそういうことを言うのだな、立つはずのない波風がだな。

あ、ほらもう。

「先輩……明日は結衣先輩とお出かけですかあ。そうですか。そうなんですか」

こっわ。いろはすこっわ。

なんでそんなに冷たい目が出るのん？

ふと別の方向からも冷気を感じて、振り向く。

あ、あれ？

雪ノ下……さん？

「あら比企谷くん、明日は私と部の備品を買いに行く筈ではなかったかしら？」

「は？——あ」

やっべ、忘れてた。

「備品の買い出しなら、雪ノ下先輩だけでも大丈夫ですよね、せんぱい」

「あら、比企谷くんは奉仕部の大事な備品よ。備品が備品の買い出しに行くのは当然じゃない」

「ダメだよつ、明日はヒツキーとパセラでハニトー食べる約束してるんだからっ」

三人の美少女の視線が火花を散らす。やがてその視線は俺に……

え、俺!?

「せんぱい、明日は誰とお出かけするか決めてください!」

「ヒツキー、信じてるからね」

「比企谷くん、部長命令よ」

「さあ、誰を選ぶの」

あー、俺がもつとたくさんいたら良かったのに。

——三〇〇人とかはいらんけど。